

昭和二十七年二月一日 第三種郵便物認可
昭和二十四年六月三日 同有鉄道寺別家路雄志將二一九九号

經濟論叢

第104卷 第3号

哀 辞

故鎌倉 昇教授遺影および原稿

経営戦略について……………	田 杉 競	1
ニュースと「企業性」の接点……………	島 崎 憲 一	23
フィスカル・ポリシーと完全雇用……………	森 岡 孝 二	41

記 事

鎌倉教授逝く

追悼講演 (石川常雄・市村真一・堀江保蔵)

追憶談 (杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋)

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京 都 大 学 經 濟 学 会

鎌倉君の学風と人柄

堀江保蔵

鎌倉君が定年々齢に達するためには、もう20年ほど生きなければならなかった。私は定年退職してからすでに2年あまりになる。したがって、年齢の上では親子ほどの違いがあるわけであるが、学問の上では、私は、絶えず同君に教えられながら、今日にいたったものである。

今年3月まで7年間、私は非常勤講師として、ノートルダム女子大学で教養の経済学の講義を担当したが、そのうちの3年間、同君の著書「日本経済論」（昭40、有斐閣）を教科書に使った。理由の一つは、身近かな現実とそこに内在する論理とを平明に説いたこのような書物が、とくに経済学専攻でない女子大学生の学習に、もっとも適していると考えたことであるが、もう一つの理由は、私自身にとって、この書物が、日本の近代経済史を処理するための方法論を示唆してくれる点にあった。つまり、私自身の勉強のために、繰返し読む機会を得ようとして、この書物を教科書に使ったのである。

鎌倉君の学風をいっそうよく示しているのは、筑摩書房から出た「現代企業論」（経済学全集、第14巻、昭41）であって、理論的であると同時に歴史的な叙述が、マクロの観点から、あるいはミクロの観点から、また手に入れうる限りのあらゆる資料・文献を駆使して、展開されている。そして、せっかちな結論が掲げられていないところにも、君の学風の一端がうかがわれるといつてよい。これも私事になるが、この書物の別冊付録に、私は「わが国における企業家活動の展開」という小論文を執筆しているが、これは鎌倉君の依頼によるところであった。

こういう因縁話をもう一つ挙げると、さかのぼって昭和33年に「価格・独占・競争」（創文社）という著書を君が公けにしたとき、畑違いの私が、その書評を「経済論叢」（第82巻第6号）に執筆する破目になった。それは、この書物がアメリカ経済の現実を理論的分析の対象としたものであり、私がいささかアメリカ経済の歴史的研究をしていたという関係によるのであるが、それはともかく、この書物は、価格理論を実地に検証しようとか、アメリカ経済そのものを描こうとかしたものでなく、近代経済学の中心課題として精緻な理論にまで組み上げられた価格論をふまえて、きわめて広い視野に立って、経済の現実を理解しようとしたものなのである。したがって、この書物からも、私は、経済史の方法を考える上で、多くの示唆を与えられた。

私自身のことを申し上げると、自分がどの学派に属するのか、深く考えてみたことはないが、人呼んで、歴史学派に属し、しかも方法論が無いというような批判を受ける。

どういわれようと、あまり気にしないたちであるが、しかし、たとえば明治維新後の現代経済史を取り扱うには、多少ともに近代経済学の素養が必要であるくらいのことは考えていた。たまたま、経済および企業の行動の現実を素材にして、その解明に近代経済学理論という武器を駆使している鎌倉君の学風に接し、またその数々の著述を通じて、君の教えを受ける結果になったのである。さらに、事実および事実関係を豊富に引用すると同時に、難解な表現をつとめて避けることに努めた君の叙述態度、平明にして流麗な君の文体は、私のような歴史学の徒には、大変魅力的であった。

鎌倉君が、あくまで事実を素材にして理論を駆使したのについては、単に君の歴史的素養と近代経済学への深い造詣だけが、然らしめたものとは思われない。君はマルクス経済学も一通りならず勉強して居り、また企業経営論にも詳しくあった。さらに経済政策論も十分にこなせる人で、いって見れば、行くところとして可ならざるなき、稀に見る幅の広い学者であった。国連の経済調査官として、二度にわたって招聘せられたのも、故なしとしない。私知っている範囲はきわめて狭いが、西洋の経済学者の中に類を求めるならば、歴史学派とマルクス学派の総合の上に立ったヴェルナー・ゾンバルト、マルクス経済学と新古典派経済学を折衷したヨゼフ・シュンペーターが挙げられる。事実、鎌倉君は、経済発展における企業家の役割その他の点で、かなりシュンペーターに負っている。もちろん、鎌倉君を直ちにこれらの大家と並べるわけには行かないであろうが、籍すに時日をもってすればと思う次第であって、私が君の夭折を惜しむのは、主としてこの点においてである。

以上、鎌倉君の学風について、私の脳裏に彫みこまれているままと述べたが、その広さと深さ、さらに専門的知識のどのレベルの人にも分らせる文章を書き、話をすることができたことなど、すべて、君の頭脳と同時に、君の人格が然らしめたところであると思う。一言にしていえば、君は、他人に対しては温かい、また自分に対しては厳しい人格であった。

昭和30年の春、私は米国国務省の招きで、3カ月間、米国各地を旅行する機会をえた。戦時中、朝鮮・満洲へ出張したのを別にすれば、初めての外国行きだった。東部を振り出しに、主として有名大学の所在地をまわって、ソートレーキ・シティから汽車でサンフランシスコへ着いたのは5月25日の夕方であったが、そのころスタンフォード大学に留学中の鎌倉君は、同じく留学中の馬場正雄君、東大の嘉治真三教授、その甥にあたる上田さんらといっしょに、わざわざ駅まで出迎えに来て下さった。そして、テレグラフ・ヒルへ案内されたり、夕食を御馳走になったりしたあと、上田さんの車で宿舎のスタンフォード・ヴィレッジへみんな送ってもらったのだが、そのさい鎌倉君はいつも助手席に乗った。道順とか、どの道は一方通行であるとか、鎌倉君が一番よく知っている

からだということであった。嘉治さん曰く、「芝居の役者番付けにいたるまで、鎌倉君が知らないことはほとんどないのじゃないか。しかし鎌倉君にも盲点があるんですよ。草や木の名前になるとサッパリですね」と。みんなで大笑いしたものである。

スタンフォード大学で鎌倉君が師事したのは、33歳の若さで経済学部長に迎えられたアロー教授であった。その部長就任によって、有能な教授がここへ集まったといわれるほどの学識・人格を兼ね備えたアロー教授のもとで、ショウ・アブラモヴィッツ、ハリー・オーシマなどの有能な学者に囲まれて、鎌倉君はいわば寝食を忘れて勉強したのである。

それかあらぬか、鎌倉君は思わぬ過ちをしでかした。そのころの旅日記をとり出してみると、5月28日の条に私はこう書いている。『鎌倉君がヘアトニックと間違えてメチル・アルコールをかけ、眼を痛めた由、フレンチ夫人とミス・アニーに迎えられて鎌倉君を訪ねる』云々。フレンチ夫人というのは、君が部屋を借りていたフレンチ家の奥さん、アニーはお嬢さんである。スタンフォード・ヴィレッジからそこへいたる車の上での夫人の話は鎌倉君のことはかり、そして、夫人は、鎌倉君の頭脳はもとより、その温かい誠実な人柄をほめちぎっていた。私は、何だか、自分の息子がほめられているような気がしたものである。

このフレンチさんの家で、鎌倉君は部屋代をひじょうに安くしてもらっていた。何でも、君がたまたま見せた料理の腕前から、フレンチさんの昼弁当作りの役を引き受けることになり、その代償として、部屋代を安くもらった、という話であった。

こんなことから思い出されるのは、アメリカ人の生活哲学といわれている pragmatism である。これが経済取引の面に現われると、“for service rendered, I expect profit” ということになるが、それはともかく、鎌倉君は、他人事にこだわらない、割り切って物を考えまた行動する、そしてまた、ある意味で楽天的な性格の持主であった。最初からアメリカの風土に、何ら違和感を覚えずに、なじめる人柄だったように思う。こんな人柄の上に、豊かな生活経験や、事実についての豊富な知識が積み重なって、著書・論文の独特な書き方、話の仕方となって現われたのであって、君の著述や講演が広く一般社会人、とくに財界人にまでアピールしたのも、宜なるかなというべきであろうか。

仏教に逆縁ということばがあるが、私はこのことばをかみしめながら、追憶談を終りたいと思います。